

PMFの軌跡と理念 -札幌から世界、そして札幌へ-



桑原 辰徳 (くわはら たつり)

公益財団法人パシフィック・ミュージック・フェスティバル組織委員会 総務課長

札幌市生まれ。2008年、札幌市役所に入庁。病院局、区役所、危機管理対策室、総務局などでの勤務を経て、2025年4月より現職。現在は、法人の管理・運営に関わる幅広い実務を担当している。

1 札幌・北海道の夏とPMF -札幌に「世界の音」が集まる理由-

北海道の夏といえば、澄んだ空気、どこまでも広がる青空、そして涼しい風。そんな爽やかな季節に、札幌の街へ世界中から若い音楽家たちが集まってくる特別なイベントがあります。それが、パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌、通称「PMF」です。

1990年の第1回開催以来、PMFは北海道・札幌の夏の風物詩として市民に親しまれてきました。期間中は、世界各地から集まった若手音楽家たちによるコンサートが、札幌市内をはじめ道内各地で開催されます。ピクニック気分を楽しめる野外コンサートから、本格的なオーケストラ公演まで、クラシック音楽をはじめ聴く方にも気軽に楽しんでいただける公演が揃っています。

ただ、PMFが他のコンサートと一線を画するのは、その中心に「教育」があることです。出演する若い音楽家たちは、10倍を優に超えるオーディションの狭き門をクリアした精鋭たち。著名な演奏家・指揮者のもとで約1か月にわたり学びながら、舞台に立ちます。真剣に音楽と向き合うその姿もまた、PMFならではの魅力といえるでしょう。

次章では、PMFがなぜ札幌で生まれたのか、その歴史と理念をひもといていきます。

2 創設の経緯 -レナード・バーンスタインの意志-

PMFはひとりの音楽家の情熱から生まれました。アメリカ出身の指揮者・作曲家、レナード・バーンスタイン(1918~1990)です。PMFに息づくすべての理念は、彼の音楽への情熱と、教育への深い信念から始まっています。ミュージカル「ウエストサイド・ストーリー」の作曲者として広く知られる一方、20世紀を代表する指揮者として世界の音楽シーンに大きな足跡を残したバーンスタインは、優れた演奏家であると同時に、音楽教育にも情熱を注いだ人物として、後世にその名を刻んでいます。

晩年のバーンスタインが強く望んだのが、自らの残された人生を若い音楽家の育成に捧げることでした。ただ技術を磨くだけでなく、異なる文化や背景を持つ者同士が音楽を通じてつながり、互いを理解し合う、そのような場を世界に生み出すことがバーンスタインの切なる願いであり、その構想を形にしたのが



レナード・バーンスタイン



第1回PMFポスター

PMFです。

1990年、バーンスタインはロンドン交響楽団とともに札幌でPMFを創設し、自ら芸術監督として第1回の開催を実現させました。音楽祭の名称「パシフィック (Pacific)」には「太平洋」という意味に加えて「平和」という意味もあります。太平洋を囲む国々が音楽を通

じてつながり、平和な世界を築いてほしい、そのようなバーンスタインの願いが、太平洋に面したアジアの都市、札幌への想いと重なりました。

しかし、バーンスタインはその第1回開催からわずか3か月後、1990年10月14日にこの世を去ります。第2回以降の開催が危ぶまれる中、同年12月31日にニューヨークで行われたバーンスタイン追悼演奏会の席上、板垣武四札幌市長（当時）がその意志を受け継ぐことを宣言。以来、PMFは「音楽の力で世界の若者をつなぎ、平和に貢献したい」というバーンスタインの想いを胸に、歩みを続けてきました。

それから35年余り。PMFは、これまでに世界79か国・地域から延べ約3,900名の若手音楽家を育て上げ、彼らは今、世界200以上のオーケストラをはじめさまざまな音楽の現場で活躍しています。バーンスタインが夢見た「音楽を通じた世界平和への貢献」という理念は、こうして今も世界中に響き続けています。

3 PMFの特徴 - 教育を核とした国際音楽祭 -

3-1 世界三大教育音楽祭としてのPMF

PMFは、アメリカのタングルウッド音楽祭、ドイツのシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン音楽祭とともに、「世界三大教育音楽祭」のひとつに数えられています。いずれもバーンスタインにゆかりのある音楽祭であり、「音楽教育を通じて世界に貢献する」という

共通の理念のもとに結ばれています。PMFはこの2つと並び、世界的に権威ある教育音楽祭として高い評価を受けており、アジアを代表する教育音楽祭としてその役割を担っています。

単に「規模が大きい」「有名な演奏家がある」というだけでは、世界三大教育音楽祭には数えられません。教育プログラムの質と実績、そして音楽を通じた国際交流への貢献、それらが国際的に認められてこそ得られる評価です。PMFがこうした評価にふさわしい音楽祭であり続けるために、毎年積み重ねられる教育の営みこそが、その根幹を支えています。

3-2 教育プログラムの仕組み

PMFの教育の中心を担う「オーケストラ・アカデミー」は、18歳から29歳までの若手音楽家を対象に、世界各地で行われるオーディションにより参加者が選抜されます。

アカデミー生への指導を担う教授陣も、世界最高峰の顔ぶれが揃います。会期前半は「PMFヨーロッパ」としてウィーン・フィルハーモニー管弦楽団やベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の奏者が、後半は「PMFアメリカ」として北米のメジャー・オーケストラの奏者が指導にあたる独自のカリキュラムは、それぞれの演奏スタイルや音楽的アプローチを短期間に体験できるPMFならではの貴重な機会です。

そして、出身も文化も異なる仲間たちと約1か月の共同生活を送り、言葉の壁を越えてひとつの音楽を作り上げるプロセスそのものが、アカデミー生にとって音楽家としての人間形成の場となります。



教育プログラムの様子

経済的な負担が原因で参加をあきらめることのないよう、PMF組織委員会が札幌までの渡航費、会期中の滞在費、一流教授陣の指導料を負担するなど、世界中の優秀な若者に等しく門戸を開くこの姿勢もまた、PMFが世界から信頼される教育音楽祭である理由のひとつです。

3-3 コンサートによる学びの実践

PMFのコンサートは、単なる演奏会ではありません。アカデミー生が日々の練習で培った技術と表現を、実際の舞台上で聴衆に届ける「学びの実践の場」です。真剣な眼差しで指揮者と向き合い、仲間と音を重ねるアカデミー生たちの姿には、完成されたプロの演奏とはひと味異なる、ひたむきな熱量があります。

多岐にわたる会期中のコンサートの中でも、芝生の上でクラシック音楽を楽しめる「ピクニックコンサート」は、クラシック音楽をはじめて聴く方にも気軽に足を運んでいただける名物イベントとして、またPMFと市民をつなぐ開かれた場として、長年にわたり愛され続けています。演奏会は道内各地でも開催され、普段クラシック音楽に触れる機会の少ない地域の方々にも、世界水準の演奏をお届けしています。PMFのコンサートは、教育の成果を発信する場であると同時に、北海道全体を音楽で満たす豊かな文化事業でもあります。

4 教育事業の成果と好循環

4-1 修了生の活躍

PMFで学んだ延べ約3,900名の修了生たちは今、世界200以上のオーケストラをはじめ、さまざまな音楽の舞台上で活躍しています。

しかし、PMFが目指す教育の成果は、修了生が世界に羽ばたくことだけにとどまりません。PMFの教育が生み出す好循環として特筆すべきが、修了生の「凱旋」です。PMF2024ではエリヤス・グランディが、PMF2025ではカーリーナ・カネラキスとダヴィッド・ルンツが指揮者としてPMFに凱旋。さらに開催35回の節目を祝う「ホームカミング・オーケストラ演奏会」では、世界各地のプロオーケストラで活躍する修了生ら約40

名が集結し、PMFへの感謝と音楽への情熱を音に込めた演奏は、多くの聴衆の心に深く刻まれました。グランディはその後、札幌交響楽団の首席指揮者に就任。PMFを通じた縁が、札幌の音楽文化をさらに豊かにするかたちへと広がっています。

かつてアカデミー生として学んだこの地に、今度は世界を代表する音楽家として、指導者として戻ってくる、その姿こそが、PMFの教育が生み出す好循環を象徴しています。

4-2 地元・札幌への還元

PMFの好循環は、地元・札幌にも豊かな恵みをもたらしています。

「ミナミナコンサート」では、病院や福祉施設など、普段コンサートホールに足を運ぶことが難しい方々のもとへ、教授陣やアカデミー生たちが出向いて演奏を届けるアウトリーチ活動です。音楽を通じて人と人が直接つながるこの取組は、PMFが大切にしてきた「音楽の力」をまさに体現するものです。

また、「公開マスタークラス」や「オープンリハーサル」では、教授陣がアカデミー生を指導する様子やPMFオーケストラのリハーサルを間近で見学でき、本番に向けた音楽づくりの現場をリアルに体感することができます。小学生がPMFオーケストラと共演しながら音楽を学ぶ「リンクアップコンサート」、クラシック音楽を楽しく身近に学べる「PMFクラシックLABO♪」など、子どもから大人まで幅広い世代に向けたプログラムも充実しており、PMFは世界に開かれた教育音楽祭であると同時に、札幌市民の生活に深く根ざした文化事業でもあります。



子どもたちとのふれあい（リンクアップコンサート）

5 PMFを支える人々、北海道における文化資産としてのPMF

5-1 「聴く」「参加する」に加え、「支える」という関わり

35年以上にわたりPMFが開催され続けてきた背景には、音楽祭の理念に共鳴し、さまざまな形で支えて続けてきてくれた人々の存在が欠かせません。PMFへの関わり方は、コンサートを「聴く」だけではありません。「支える」という形の参加もまた、PMFをつくる大切な力のひとつです。

企業・団体による協賛、「PMFフレンズ（賛助会員）」への入会や個人寄付、アカデミー生の日本文化体験や会場でのグッズ販売などを担うボランティア、関わり方はさまざまですが、「世界から集まる若い音楽家たちを北海道で育てたい」「この音楽祭をこれからも続けてほしい」そうした一人ひとりの想いが、PMFの歩みを力強く後押ししています。

アカデミー生や教授陣にとっても、ボランティアとのふれあいは札幌での滞在を豊かにする大切な思い出のひとつになっています。



ボランティアとの方々との関わり（日本文化体験）

5-2 北海道遺産への認定『PMF～豊かな風土に根差した世界につながる教育音楽祭～』

2018年11月1日、PMFは「北海道遺産」に認定されました。

知床や釧路湿原といった雄大な自然、北海道開拓の歴史を伝える建造物が並ぶ中、国際的な教育音楽祭という「文化・教育の営み」が、北海道の風土や人々の

暮らしに深く根差した財産として認められたことはとても大きな意義を持ちます。

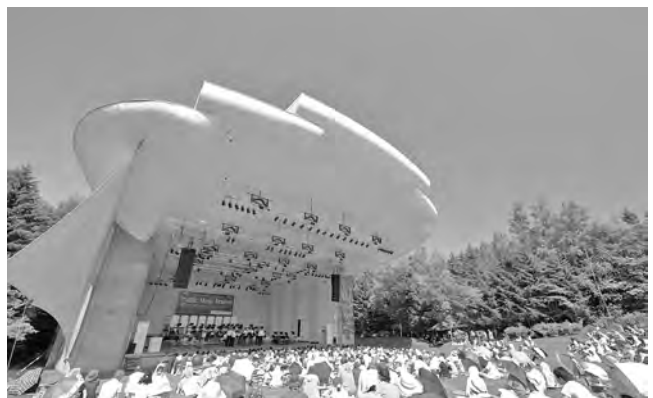
バーンスタインの理念のもとに生まれ、札幌市民をはじめ多くの人々の支えによって育まれてきたPMF。世界の若い音楽家を育て、その成果を地域に還元し、そしてまた次の世代へとつないでいく、その循環こそが、PMFが北海道の文化資産として認められた理由にほかなりません。

6 誰でも楽しめるPMFーあなたもこの夏、PMFへー

「クラシック音楽は難しそう」「コンサートホールは敷居が高い」そう感じている方にこそぜひ知っていただきたいのは、PMFにはクラシック音楽をはじめで体験する方でも気軽に楽しめるプログラムが数多く用意されているということ。

芝生の上にシートを広げ、お弁当を持ち寄りながら音楽を楽しむ「ピクニックコンサート」は、まさに夏のおでかけにぴったりのイベントです。「PMFクラシックLABO♪」では、PMFならではの切り口でクラシック音楽の新たな魅力に気軽に触れることができます。ドレスアップも、作法も、難しい予備知識も必要ありません。

次号（6月号）では、PMF2026の開催概要や注目の見どころ、チケットの購入方法や楽しみ方など、今年の夏をPMFとともに過ごすための情報をたっぷりとお届けします。ぜひ、この夏のおでかけ先のひとつに、PMFを加えてみてください。



青空の下でのピクニックコンサート